

エチオピア紹介

ヨハネス・アベラ・アエレ

エチオピアはアフリカの東側に位置するアフリカ最古の国家であり、約一〇万平方キロメートルの国土に八〇〇万人以上の人口を有する。三二〇万年前のアウストラロピテクス・アファレンシスの女性の骨格が発見され、人類発祥の地のひとつと考えられている。紀元前八〇〇年、ダマツトと呼ばれる王国がエチオピア北部のイエハに樹立され、のちにアクスム王国にとつてかわられた。この帝国はスーダンからアラビア半島南部にまで広がり、その当時の列強のひとつといわれていた。アクスム、ローマ帝国、ペルシャそして中国である。キリスト教が国教となり、イスラーム教徒がメッカでの迫害から逃れてきたのもアクスム朝の全盛期のことであった。アクスム王国が後の世代に残した遺産は、金貨鑄造、ゲエズ・アルファベツトおよび数字を表す文字、暦そして音符（現在、ほかの国では使われておらず、エチオピアだけで使われている。）などである。アクスム王国の没落の後、その末裔は南部へと移住し、周囲か

ら孤立し高地にキリスト教の王国を、低地にムスリムの国を築いた。そして何世紀にもわたり仲間同士の戦いに明け暮れた。その当時の修道士や騎士が残したものとして石造りの教会、城郭、ハラルの外壁がある。

エチオピアは一九三六、四一年のイタリアによる短い占領期を除けば独立国家であり続けた。近代のエチオピアは数多くの困難に悩まされた。たびたび襲う旱魃や飢饉、貧窮、専制政治、そしてこれらに終止符を打つための苦しい闘いがくりひろげられた。現在、エチオピアは比較的、より平和な政治、社会生活を保ち、経済も成長している。そして、大規模なインフラ整備プロジェクトと天然資源再開発に乗り出している。もちろん本格的な発展へは長い道のであるが、すでに歩みは始まっている。エチオピアはアフリカ大陸やグローバルな舞台でも顕著で積極的な役割を果たしている。アフリカ連合の共同創設者でありその本部が置かれている。そして平和維持活動に果たしている役割に対しては国連から信任と賞賛を得ている。

エチオピアは多くのそして多様な自然観光資源に恵まれている。地表が海の水位より一〇〇メートルも低いダロール地溝帯から海拔四〇〇〇メートルを超す山々が連なるシミエン山脈まで目を見張る絶景である。他にも刺激的な風景としてソフ・オマール洞窟やタナ湖などがある。エチオピアは野生動物が豊富であり、なかにはエチオピアでしかみられない動物もいる。

人口の約八五％は農村に暮らしており、穀物の生産、エンセツトの栽培、牧畜よって生計を立てている。残りの一五％の人口は都市に住んでおり、最大の都市は首都であり、商業の中心でもあるア

ジスアベバである。エチオピアの文化は多様で豊かである。八〇の言語文化グループがあり、それぞれ独自の音楽、衣装、そして伝統的な料理を有している。エチオピアは野生のアラビカコーヒーの原産国でもある。そのコーヒーを飲む儀式は観光客にはもちろんのこと地元の人たちにとっても特別の経験である。またエチオピアは世界的に著名なアスリートを輩出し、トラックに君臨してきた。

エチオピアと日本のつながりは正式な外交以前から始まっている。一九六四年の東京オリンピックの馬拉ソンで優勝したアベベ・ビキラを日本人は決して忘れないだろう。アベベはオリンピック記録を破つたのに疲れた表情をまったくみせなかった。今は亡き、伝説のエチオピア人の歌手、ティラフン・ガササの有名なナンバーのひとつに日本の美への愛着を歌った歌がある。歌詞はアムハラ語でビデオ・クリップはユーチューブで見ることができる (<http://www.youtube.com/watch?v=4KM6vtnOg>)。

六〇年代に小学生であったエチオピアの人なら著名なエチオピアの作家ケベデ・マイケルによるアムハラ語の本、『どのようにして日本は文明化したのか?』を必ず覚えていただろう。

日本の首相二人がアジスアベバでのエチオピア・コーヒー・セレモニーに出席したことがある。あの姿はまさに、エチオピアと日本との強い絆の証しであろう。